

## スキヤキが“好き焼き”になる フィラデルフィアの親日食

いまや海外でも人気の、にっぽんスキヤキだが、所変われば何とやら、スキヤキが海外では珍しかった時代に東京は、ある老舗のすき焼き屋さんの女将に、こんな手紙が届いた。

“お元氣ですか、フィラデルフィアに暮らしてはや十数年、外国での一人暮らしはさびしいでしょうと、いろんな家庭で夕食に招いてくれます。あなたのために、きょうは日本のお料理にしましたといって出してくださいませるのがスキヤキで、それにご飯までついて出るのです。手紙の主と、すき焼き屋の女将は学校時代の友だちで、彼女がいよいよフィラデルフィアへ渡るといふ三日前、店に招いて、特別心を込めたすき焼きをごちそうし、別れの宴とした日のことを思い出す。

が、この十数年、何度か便りはあったものの、ついぞスキヤキのことなど書いてきたことはなかったのにそれが、とつぜんのスキヤキ話。彼女を招いてくれた家を出してくれたスキヤキが、はるばる女将を思い出させるほどワンダフルだったのか？

半ばいづかり、半ばは胸躍らせて先を読む。

そこには、彼女をスキヤキに招いてくれた親日家の女主人が、南部鉄のすき焼きなべや、ソイソース（しょうゆ）、みりん、炭、コンロなどを手に入れるのにいかに苦心し、ニュー

ヨークやロサンゼルスを知り合いや、日本人街の雑貨屋などで、そろえるのにかかれこれ半年がかりだったことなどが、リアルに書き連ねられていた。

“わたしは、女主人の苦心談に耳をかたむけているうち、だんだん日本にいるような気分になってきて、今夜はほんとに、何年ぶりかで故国のすき焼きがいただけのぞと胸がわくわくしてきましたのです。が、そんな夢心地の中ではとわれに戻ると、なんと、南部鉄のすき焼きなべの中でほどよい音を立てていたのは、アメリカ産の牛肉はともかくとして

○ニンジン ○マッシュルーム

○キャベツ ○セロリ

などのなんともユニークな面々だったのです!?”

文学少女だった彼女は、ここで筆をおいていた。

その心を思って、すき焼き屋の女将はこう返事を書いた。

“好き焼き”なんだから、なにも気にすることはないのよ。

